

## 国際協力特別賞

95%～私がやらなければならないこと～

盈進中学校 3年  
馬屋原 瑠美

「95%。」この数字に、私は、開発途上国の教育支援に尽力したいと強く思った。

私は先日、「フリー・ザ・チルドレン・ジャパン」で、フィリピンの視覚障がい者教育支援事業を担当している石田由香理さんのお話をうかがった。石田さんは全盲である。冒頭の数字は、フィリピンの視覚障がいのある子どもの小学校への未就学率だ。

石田さんによると、フィリピンでは、初等教育への平均就学率が96%に達しているが、視覚障がい児の初等教育就学率は5%未満。WHO（世界保健機関）は、発展途上国における障がい者の割合を約15%と発表しているが、フィリピン国家統計局が把握している障がい者の割合はわずか約1.6%であると言う。これは、何らかの障がいがある子どもは、出生すら届けられず、社会からその存在を消されたままに生活している人も多くいるという証拠である。また、障がいのある子どもにどんな教育をすればいいかわからないなどの理由で、家族にも捨てられる子どもたちもいると言う。フィリピンでは、障がい者は、社会から“邪魔者”扱いされて暮らさざるを得ない社会状況があるということなのだ。私は、同じ地球のあまりに悲しい事実衝撃を受け、すぐには信じられず、知らなかった自分を恥じた。

『お前がいなければよかったのに』と母に言われ、悔しかった。」フィリピンの子どもに自分を重ねた石田さんの静かな語りに、私は思わず涙した。私だったら…と考えたら、生きる意味を見失ってしまうのではないかと思ったからだ。しかし、そんな経験をしたからこそ、フィリピンの視覚障がいのある子どもたちにやさしく寄り添う石田さんを、私は心から尊敬し、私も石田さんに続けたいと思った。

私が通った小学校には、特別支援教室という障がいのある子どもたちが勉強する場所があった。私は、彼らと一しょに折り紙を楽しんだり、本の読み聞かせをしたり、給食を食べたりして過ごした。そんな時間や空間を私は「あたりまえ」だと思い、彼らの存在をととても身近に感じて、つながっていた。

日本の教育は、何人たりとも、障がいの有無に関わらず、等しく「受ける権利」があり、保護者は義務教育を「受けさせなければならない。」石田さんはこう語った。「障がい者にとって学校とは学問知識だけでなく、生活スキルや生きる術を学ぶ場所なのです。親たちはどう育てたらいいのか不安に思っています。だからこそ、障がいのある子どもが自立するために、教育は不可欠なのです。」十分な教育を受け、「社会の役に立ちたい。誰かと共に誰かのために働きたい」と思うのは、国境を越えて、みな同じだと私は思う。

全盲の石田さんが、私の目を大きく開かせ、彼女が光となって、私を照らし、「世界を見よ」と教えてくれた。私は、どんな境遇で生まれようと、誰もが対等に「共に生きる」世界をつくるために、世界をもっと知りたい、彼女たちと活動したいと思うようになった。